

先生がメスガキにロリ コンにされる話

汎用うさぎ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある田舎の小学校の教師、松田龍司は勤務3年目となる新米教師だった。

新米教師ながらも今年は6年生のクラスの担任を受け持った龍司は夏休みを迎える教え子のため課外講習の開講を考える。

そして夏休み前最後のテストが終わり、翌日から夏休みが始まるという日の放課後、教え子の水瀬 沙耶香が龍司の居る宿直室を訪れ……

子供好き（準ロリコン）の主人公がメスガキによつて真正のロリコンに墮とされる話。主人公はメスガキの誘惑に耐え、大人の分からセムープをキメることが出来るのか?!?!?

（出来ない）というお話。

「は会話、○は心の声です。」

目次

設定	1
1. 水瀬沙耶香	5
2. ラジオ体操	11
3. 妄想	16
4. 矢吹七海	24
5. 絶体絶命	31
6. テスト	46
7. 命令	58
8. 課外講習〜1日目〜	71

設定

主人公：松田龍司まつだりゅうじ（24）

今年で勤務三年目となる新米教師。クラスは6年生のクラスを受け持っている。子供が好きで小学校教員を目指す。『生徒ファースト』を掲げているため、男女問わず多くの生徒から慕われている。また生徒保護者からの信頼も厚い。

生徒からは『先生、龍司先生、龍ちゃん先生、ドラゴン先生』など多数のあだ名をつけられている。

学校の宿直室の主人。宿直室に置いてある物は大体龍司の物。歯ブラシなどの小物からプラスチック製のタンスなどの収納家具も龍司の物である。もはやその住人。

メスガキ、水瀬沙耶香の所為で真正ロリコンにされてしまう本作の1番の被害者。

趣味は山登り

身長179cm、体重75kg、筋肉質。誕生日8/29日

メインヒロイン：水瀬沙耶香みなせさやか（12）

メスガキ。ガキ。

諸悪の根源。子供好き（純粹）だった主人公を真正ロリコンに墮とす。

運命的に小学4・5・6全てクラスの担任が主人公だった。

生徒のために尽くす主人公の好意を抱くのに時間はかからなかった。先生好き好きアピールを控えめに行なっていたが、主人公はそれを華麗にスルーし続ける。

そして、卒業を控える6年生になった夏、遂にメスガキは実力行使に出る。

無毛貧乳イカ腹娘。

趣味は先生弄り

身長144cm、体重40kg、バストサイズA、セミロングの黒髪をツインテールにしている。誕生日6/3日

サブヒロイン：矢吹七海やぶきななみ（12）

沙耶香と同じく主人公に好意を抱く女の子。恋バナで沙耶香が主人公を狙っていると知っていたため、課外講習を2人きりにしてはならないと飛び入り参加。

普段は快活な彼女だが、主人公に対しては奥手になりがち。

そのため、帰りの会で課外講習の受講希望者が他に誰も居なかったので手を挙げられなかった。

小学生らしからぬボディの持ち主。高校生と言われても全然違和感ないくらい。運動を良くするので、出る所は出て引つ込むところは引つ込んだグラビア向け体型。

本人は他の女子よりも体が成熟している事を気にしている。（胸やお尻の大きさと

か陰毛の生え具合など)

主人公に対しては性的な誘惑はせずに純情アタックを仕掛ける。この辺がメスガキとは違う正統派美少女である。

(小学生にしては) 巨乳のアスリート少女

趣味はスポーツ全般

身長152cm、体重49kg、バストサイズD、黒髪ショート。誕生日5/27日

舞台となる小学校

全学年で生徒が80名の小学校。田舎の小学校の割に設備は整っている。プール、体育館、広い校庭、暖房設備などが完備されている。

宿直室

生活に困らないように設計されている。狭いが慣れれば快適。トイレ、シャワールーム、洗濯機、ガスコンロ、敷布団なんでもござれ。

小学校周辺

山で囲まれており自然豊か。綺麗な沢や川が流れており、子供達は夏になるとプールかこの川で涼む。また遠足などで山を登ったりする。また、山頂には趣深い神社があり、この地に伝わる伝説を語り継いでいるとかなんとか。

村の男女比は3 : 7 (男 : 女) くらい。

1. 水瀬沙耶香

リモコンのスイッチを入れると年季の入ったクーラーがガラガラと音を立てながら夏の暑さに蝕まれる宿直室を徐々に冷やして行く。

玄関口で靴を脱ぎ、テストの答案や宿題のプリント、日直の日誌をドサリと机の上に置く。膨大な量とまではいかないが、丸つけや宿題のチェックをこれからすると考えると溜息を吐かざるを得なかった。

外は太陽をこれでもかとギラつき、蝉がけたましく自身の存在を主張している。いつも児童で溢れかえる校庭は人一人もおらず、伽藍とした光景だ。

(まあ、テスト終わって明日から夏休みだもんなあ…)

遊びたい盛りの小学生だ、テストが終われば皆『○○ん家で遊ぶぞ!』なんて言っただけの挨拶と同時に教室から飛び出して行った。

それを羨ましそうに思い返している俺こと松田龍司はこの小学校の新米教師である。勤務歴は今年で三年目となり、教える科目は保健体育、体育、国語でメインは体育科目だ。

総人数15名の小学6年生のクラスを受け持っていて、自分で言うのもなんだが生徒

に慕われ、他のクラスからもいいなあと声が聞こえるほど人気がある。これはとても名誉な事であるし、これからも生徒の力になれる頼れる先生としてありたい。

しかし、キラキラと青春の真つ只中の小学生を見ると、ふと暗い気持ちを抱いてしまう時があつた。それが今だ。

もし自分が小学生に戻れたら、たくさん友達作つて、たくさん勉強して、死ぬほど遊んで、クラスの頼れる存在になつて……女の子にモテモテになつて……

大人の知識を持つて子供に戻れたらと夢想する。何回も夢見たが最後は現実に戻り、悲しいだけだ。

「……はあ、なんか虚しくなつてきた……。さて仕事仕事……」

「もしも」の話なんてするだけ無駄だと毎回分かつてはいるんだけどなあ。どうしようもないことに意識を割いても仕方がない。生徒のために働くんだ。

手付かずの答案に手を伸ばし、赤ペンを手に持った瞬間――

「コンコン」とリズム良く、宿直室の戸が叩かれた。

「はい、今開けますー」

誰だろうか？この部屋に用があるのは。夏休みの間は俺が殆ど宿直室に泊まり込みだから用のある教員などいないはずだが……

出来れば玲子先生（教員の中で最も若く美しい女性教員）だったらなあと

そう思いながらも扉を開けるとそこには誰も居なかった。

「あれ？」

「先生、下だよ下！」

鈴のような声が下から聞こえて視線を下にやるとそこにはランドセルを背負った黒髪みなせの美少女がいた。

水瀬みなせ沙耶香さやか、俺の受け持つクラスの1人だ。身長140cm代の小柄な少女で元氣滂刺で笑顔の眩しい彼女は男女問わず人気がある生徒だ。ぴよんぴよんと跳ねて自分の存在をアピールする度にサラサラの黒髪がヘアゴムで結ばれたツインテールがパサパサと揺れている。

俺がここにきてからずっと受け持っている生徒であり、相当懐かれているという自覚はある。事あるごとに俺にニコニコしながら近寄ってくる可愛らしく思い入れのある生徒の1人だ。

そんな彼女だが、周りに比べて背が低い事を気にしているため、可憐な表情にプンスコと怒りがみえる。

「え？おお、すまんすまん。他の先生かと思っててな…」

「沙耶香の事バカにしてるでしょ」

「してないって、気分を悪くしたならこの通り！許してくれよ」

手を合わせて頭を下げる。大の大人が情けないと思うだろうか？いや、ここは小学校の教員として、真摯に向き合う上で俺は全く恥ずべき事ではないと思う。

生徒の信頼を得られない教員は何処かしらでミスをする。

俺の先輩教師の言葉だ。これまさに然りと、俺はこの言葉を信じて教師をやつてきた。その成果は確実に出ていると思う。俺はこの学校内で人気の先生、去年一昨年の卒アルのランキングでは一位に輝く実績がある。今年も頑張るぞ……！

とまあ、それはさて置きだ。下げた頭をチラリと女兒に向ける。

「ふつ、先生がそこまで言うなら許してあげる。他の先生なら許さないけど。」

許しを得られたので頭を上げて改めて沙耶香と向き合う。その際少し屈んで視線を合わせる。

「おいおい、それは他の先生が可哀想だろう」

沙耶香は『禿山とか豚丸とか生理的に無理だわ』とあつげらかに喋る。山田先生と金丸先生には流石に同情した。

「いーの、先生は『特別』だから……」

『特別』を強調するように囁く沙耶香にドキリとする。小学生の沙耶香が酷く大人びて見える。いや、大人びてではない。客引きする娼婦のような妖艶な笑みだ。

こんな笑みを浮かべる少女だったか……？

(何考えてるんだ俺…相手は小学生だぞ…。なんで男って特別とかって言葉に弱いんだ…)

俺はロリコンじゃない。子供が好きで小学校の教員を目指したが、性的対象に捉えたことはない。頭を軽く振って沙耶香に視線を戻すと普段の可憐な笑顔の少女がそこにいた。さっきのは幻覚だろう。

「ふう…ともかく、何の用だ？テストの点数ならまだ丸つけてないから分からんぞ」
「私テストには自信あるもん。別にそんな事が知りたくて来たんじゃないよ！先生帰りの会で言ってたじゃん。」

帰りの会で…はて、帰りの会で言ったこと？課外講習のことか？

「あーもしかして課外講習か？あれは成績が悪い奴のために開いたんだが…」

帰りの会で課外講習について話をしている時、聞いているのは真面目な女子くらいで特に課外講習を受けて欲しかった成績不振の男子や女子は何して遊ぶかとソワソワして話を聞いていなかった。

沙耶香はジッと俺を見つめていたので話を聞いていたのは知っていたが…沙耶香は学校が誇る成績優秀者だ。今更ながら課外講習は必要ないと思った。

「先生知ってるでしょ？私が中学校受験するの！それに向けて受けてみようかなって思ったんだけど…」

「それは知ってるが…それだったら塾とか行けば良いんじゃないのか？」

「えー、塾はお母さんに相談しないといけないし…なによりも！私は先生に教えてもらいたいんだけどなあ…色々」と

「ただ…また沙耶香が妖艶に嗤った。心臓がドクドクと激しく脈打つ。まさか俺は昂奮してるのか…？いや、違う…意味深なこと言われてすこしドキドキしてるだけだ…。そうに決まってる。」

「あ、ああ…分かった。どうせ誰もいないと諦めていたけど沙耶香のために課外講習を開くよ」

俺は何か危険だと感じつつも目の前の少女、水瀬^{みなせ}沙耶香^{さやか}の課外講習を認めてしまった。

「やったあ！ありがとう、龍司センセ♡」

これが俺の過ちの夏、人としての転落の始まりだった。

2. ラジオ体操

ピピピツと規則的に鳴るアラームに手を伸ばして止める。時計の針は朝の5時を指している。もはや実家と言っても過言ではなくなった宿直室の洗面台で顔を洗い歯を磨く。宿直室は狭いが、何でもある。布団があり、クーラーがあり、冷蔵庫があり、シャワーもある。なんならガスコンロも。設備が整い過ぎて生活に困らない。住めば都とは言ったもので、もはや住んでいるアパートよりも住み心地が良い。

この学校を作る際、教員が宿直室に寝泊まりできるように設計したんだと自慢げに語るのは前任の校長の弁である。

単純にこの小学校は田舎に作られたため、数少ない生徒に万全の対応を取れるように宿直室に住み込みで働く教員が欲しかったらしい。

その役目が教員三年目の新米の俺に渡ったわけだ。まあ、住み込みだからキツイところはキツイ。生活の殆どを生徒に割り当てないといけないわけで、余程生徒のことを思う教員が若い教員にしか務まらない。

もし俺が後者ではなく前者で選ばれたのなら光栄の限りではある。いや、他の教員から前者だと褒め称えられたが大変な仕事を押し付けられられホツとした様子の教員も

いたので両手を上げて喜ぶ事は出来ない…

などと考えているうちに歯も磨き終わり、着慣れたジャージに袖を通してラジカセを持って校庭へと走る。

真夏ではあるが朝は少しひんやりとしている。少し体を震わせながらも所定の位置にラジカセを置く。未だに生徒はいない。

それも当然の話で、ラジオ体操が始まるのは朝の6時から。まだ45分程ある。それでもこうして早く待つのは偶に早く来る生徒の対応のためだ。

(まあ、朝飯食ってからでも良かったかな…)

軽い空腹に見舞われながらも生徒を待つ。ラジオ体操が終わってから食べたとしても丁度いい時間になるだろう。

今日の朝ご飯は何にしようかと考えながら校庭をぐるりと何周も走り回っていると次第に児童が集まり始める。

その五分後くらいには約50名近く生徒が集まり、数ある生徒の集団の割と奥の方に緩いタンクトップにショートパンツという涼しそうな格好の沙耶香の姿を見つけて視線が一瞬囚われる。

俺の視線に気づいた沙耶香は「あの笑み」を浮かべている。

(…いかにいかに、特定の生徒を意識するなどもってのほかだ…)

そう思いながらも視線が自然と沙耶香に向かつてしまい、尚更意識してしまふ。

自己嫌悪に陥る最中、腕時計の針が6時を指した。これ幸いとばかりに全生徒に届くように声を上げる。

「よし！ラジオ体操始めるぞ！ぶつからない程度に広がれー」

指示に従って生徒がバラバラに距離を取るのを確認してからラジカセの電源を押す。

『ラジオ体操第一〜☒』

お馴染みの音楽のリズムと共にラジオ体操が始まる。先生である自分は生徒の手本になるように体を大きく使って体操の動きを見せる。

(まずは深呼吸だな……)

腕を大きくあげ息を大きく吸い込む、生徒がちゃんと出来ているか流し目で確認しようとして、意識的に意識しないようにしていた沙耶香に目を奪われる。

「…っ!？」

正確には深呼吸で腕を大きくあげた沙耶香の脇や胸にだが。

(なんで最前列に……というかあれってノーブラ……)

先程まで生徒の集団の後方にいた沙耶香がいつの間にか最前列でラジオ体操をしていた。

見てはいけない、だが視線は沙耶香の逸らされた胸の突起物に釘付けになる。ゆるい

タンクトップの布を小さな膨らみが押し上げその中心の突起物は間違いなく乳くー
ふううううううつ…大きく息を吐く。邪な考えを頭から吐き出すように。

ラジオ体操に集中しろ…不謹慎だ…

見るな見るなと念仏を唱えながらラジオ体操を続ける。

『ー体を横に曲げる運動〜☒』

体を横に曲げる。斜め正面にいる沙耶香が目に入る。

(ーっぶっ!?!アレ完全に乳首が…!)

1番先頭に並んでいるため他の生徒には見えてないだろう。だが相對する自分からは緩いタンクトップからピンク色がはみ出ているのが見えてしまっている。

右へ左へ体を曲がる度に小さなピンク色の誘惑が目を奪う。

最低な事に俺は可愛い教え子の乳輪を見て興奮してしまっていた。

普通の大人なら罪悪感を覚えるなり、目を逸らして決して見ないようにしたりするだろう。

だが、俺はその光景が目には焼きつくほど凝視してしまっていた。罪悪感を抱く前に興奮してしまった事に俺は酷く動揺した。

そしてその動揺を嘲笑うかのように、沙耶香はタンクトップの裾を掴んで直しながら俺を見て妖艶に笑った。

「……っ!？」

その瞬間、興奮によって鎌首をもたげていた自身の分身が一瞬にして萎えた。

自分の行為に気づき、ぶわりと脂汗が体から吹き出す。なんて事をしてしまったんだ。

(見ていたのがバレた…ッ!?)

俺は三年目となる教員人生が終わったと思わざるを得なかった。この後の課外講習で顔を合わすであろう生徒に性的な目で見られたと訴えられれば、一瞬で俺の輝かしい実績はロリコン野郎というレッテルを貼られて終わってしまう!

気が気でなく、尋常ではない汗を掻きながらラジオ体操を進める。きっとこの汗は夏の暑さだけではない。

俺はその後のラジオ体操中は沙耶香の方は一度も見なかった。否、見ないように努めた。

水瀬沙耶香と顔を合わせたら全てが終わる予感がしていたから。

3. 妄想

尋常ならぬ形相でラジオ体操を終わらせた俺はハンコを求めて並ぶ生徒の出席カードにハンコを押ししていた。

大抵の生徒は遊びに行くか、今日はプール開きの日だからプールに行くかという談議をしつつ列を作っている。プール開きも俺がするのだが、今はそれどころじゃなく、沙耶香の番が回って来ることに人生最大の恐怖を感じていた。

言い訳を考えながらハンコを押しまくっていると粗方の生徒のハンコを押し終わり最後の一人、沙耶香が出席カードを携えてニコニコと歩いて来る。ハンコを押された他の生徒は既に校庭から走り去っていて他には誰もいない。ある意味好都合ではあるが、好都合なのは沙耶香も同じだろう。

沙耶香はこの時を待っていたかのように、ゆっくりと俺の側に躰り寄って来る。

(なんて沙耶香に言えばいい……ッ!?素直にガン見しててすまないと言うか……?!いやそんなの変態教師の烙印を押されるに決まってる……!)

一歩また一歩と近づいて来る。喉が異常なまでに乾き喉を鳴らす。沙耶香の動きがゆっくりと感じるほど憔悴する。

（なんて言うんだ…ッ！考えろ…！）

碌な考えも浮かばないうちに沙耶香は俺の目の前に立ち、ピツと出席カードを俺に突きつけた。

「…う…どうしたのセンチ？怖い顔してるし、汗が凄いや？」

沙耶香は出席カードを手渡しながら、俺の心配をするように顔を覗き込んだ。

その顔は怒りが滲み出たり、恥辱に歪んでいたりせず、俺を糾弾するような表情ではなかった。

（…バレて…ない？いや、アレは確実に目が合ってた。胸元も正して此方を見て嗤ってた…バレてないはずが…！）

「い、いや…なんでもない。ほら、ちゃんと押したから。明日もちゃんと来るんだぞ」

もはや錯乱状態の俺はなにも言及してこない沙耶香の様子に乗っかるように何もなかったように振る舞った。

最低な事をしてしていると気付いた時にはもう遅い、今更言い返す気力もなく、酷い罪悪感と、目の前の沙耶香ピンク色を幻視して興奮している自分に苛まれる。

「うん！あ、そういうえばプール解放って何時から何時まで？」

「あー、9：00～11：30までだな。午後は課外講習あるから13：00～15：00までかな…ははは…」

プール解放は監視員がいないと出来ない。監視員は勿論俺である。そのため、俺の都合に合わせてプール解放時間を決めることが出来る。田舎の小学校だから許されるルーズさだろう。

朝ごはん食ってゆつくりして、午前のプール解放して、昼飯食って、プール解放して、課外講習して……とまあ、それなりに大変な毎日がこれから迎えるわけだが。

「ふうん、じゃあ午後行こうかな。プール入って気持ちよくなつてから課外講習だ〜」
「あ、ああ……今日は暑くなりそうだしな」

「先生も一緒に気持ちよくなるようよ〜」

「ええっ!? あ、いやっ……先生はアレだ……! 監視員だからプールにははいらないぞ!」
(アホか俺は、気持ちいいって言葉に反応してるんじゃないやねえよ中学生か!)

意味深な発言に一瞬吃どもつてしまう。意識しないようにすればするほど目の前の少女、沙耶香の事を目で追つてしまう。頭の中で想像してしまう。

「ふうん、残念。あつそうだ! セーンセ♥!

ー沙耶香の水着姿、楽しみにしててね♥」

艶やかに微笑んで沙耶香は校庭を走り去る。俺はその後ろ姿を見えなくなるまで目が離せなかった。

そして沙耶香の水着姿を想像して自身の息子がピクリと跳ねた。

「まづい……」

朝食を食べ終え、ポツリと今の心境が零れ落ちる。無論 朝食が不味かったという訳ではなく、勿論 水瀬沙耶香の事である。

先程からずっと彼女の事が頭の中で一杯で、もしバレていてそれを暴露されたら俺の人生が終わるという不安と、バレてなければいいなあという希望的観測。

そして、先程のラジオ体操で晒された白い手足や綺麗な脇や頸、見え隠れするピンク色を鮮明に思い出して昂ぶっている自分に対する嫌悪感。

その不安や嫌悪感を押し切って、自分の欲望がムクムクと膨れ上がっていく。それは

朝食を摂り終わり顕著になってきていた。

こんな状態でプール解放なんて行ったら、水瀬沙耶香以外の女子の水着を見ただけでも勃起してしまう予感があった。

宿直室に泊まり込みという事もあつて大分禁欲生活が続いたため一度酷く興奮すれば抜かなければ落ち着く事などなく、俺の息子は完全に勃起してギンギンと痛い程にジャージを押し上げていた。

(抜くか…)

部屋の鍵とカーテンを締め、ティッシュユを用意してズボンを下げると勢いよく飛び出した逸物がベチンツと腹に当たって音を立てる。

(どんだけ興奮してるんだ…過去最大級の勃起だぞコレ…)

その原因がノーマルなAVとか雑誌ならまだしも、女子小学生しかも教え子の乳首で痛い程に勃起している事実を再認識して自己嫌悪が加速するが手はそり立つ剛直を扱き始める。

本当に最低な事だが、おかずは未だに鮮明に写真のように思い浮かぶ沙耶香の小さな胸や乳首そして脇などである。

むしろ、それ以外でシコれる気がしなかった。驚く事に扱き始めたら罪悪感など空の彼方に消え、代わりに背徳感による絶大な快樂に飲まれた。過去最高級のオカズである

のは最早疑いようがない程に捗った。

その証拠に十数分後もしない内に限界が訪れる。

「…はあ…っ…く…」

剛直は発射直前でビキビキと膨れ上がり精管を濃い精液がマグマのようにせり上げるのを感じる。

それほどまでに強烈な射精感が俺を襲う。

もう発射すると蒸発する理性が訴えかけた時、俺は両手を頭の後ろで組んでいる沙耶香を妄想する。

ラジオ体操で少し汗でじつとりとした脇やはみ出したピンク色の乳首にぶっかけた
いという欲望が際限なく溢れ出る。

『沙耶香に先生のふりふり濃厚ザーメンちよーだい♡沙耶香に！沙耶香にかけてえ♡』

「おおっ…！イクっ…！教え子に…ぶっかけて…イクっ！」

遂には下品なおねだりをする沙耶香を妄想し、全身にぶっかけて白濁液に塗れる姿を想像した瞬間、俺は盛大にティッシュに向かって射精した。

『っわ…♡先生の精液…あったかあい♡沙耶香ベトベトだよ♡』

汚している。自分の精液が沙耶香のカラダを汚している。汗ばむ脇や乳首のはみ出した胸元、妖艶に笑う顔にぶっかけていく。

手の中で剛直が激しく脈動し、「ドピュドピュドピュルツ」と勢い良く濃いゼリーの
 ような精液がティッシュへと吐き出される。

「うっ…おおっ…まだ、射精^でるっ…！」

いつもの倍以上射精が続く。快樂の解放が止まらない。溢れ出る精液はティッシュ
 を突き破り勢いよく飛び出て精液が床を汚していく。

しかし、最早それに気づかないほど快樂によつて意識が朦朧としていた。

「…はあ…はあっ…」

そして長い射精が終わり、荒い呼吸が静かな宿直室に溶け込む。

しおしおと硬さを失つて萎えていく息子、精液の染み込んだティッシュ、床に飛び
 散つた精液、蒸発していた理性が冷静さを取り戻していく。

（…最低過ぎるだろ俺…）

賢者タイムに入つて、男は初めて自分の行為の虚しさと愚かさに気がついた。

今まで一番気持ちがいい射精だったが故に、俺は自身の業の深さを感じた。こんな事
 はあつてはいけない、分かつている。

だが、自分はこの快樂と背徳の味を知ってしまった。クセになるほど強烈な快樂、背
 徳感の虜^になりかけている。

（俺は水瀬沙耶香に劣情を抱くようになってしまったのか？またあんな事^{チラ見え乳首}が起きた時、

俺は性欲に抗えるのか…?)

今までこんな事は考えたことがなかった。女子小学生に興奮するなどただの変態だ。自分は違おうと自信を持って言えていた。昨日、水瀬沙耶香と課外講習の話をする前までは。

(俺は…ロリコンじゃない…ッ!!女子小学生に欲情しないッ!)

部屋に蔓延する精液のすえた臭いが説得力のなさを如実に示しているが、男は決して水瀬沙耶香に劣情を抱かないと心に誓いながら部屋の掃除をして午前のプール解放に向かった。

4. 矢吹七海

燦燦と照りつける太陽の下、わーわーきやーきやーと叫びながらプールで遊ぶ子供達をプールサイドから見守る。

男子はビート板の上に立とうと馬鹿したり、水中に沈むゴム玉を何個多く集められるかなどアクティブに遊んでいる。

女子は水を掛け合ったり水面にプカプカと浮いたりと静かにプールを楽しみ、男子の馬鹿を笑っている。

俺は男子がやり過ぎて危ないことをしないか監視しつつ、プールを楽しむ女子一人一人に目を向ける。

(……うん、大丈夫だ。息子がピクリともしない。)

二、三週間分の精液が出たと言っても過言じゃない量だったので、激しく興奮しない限りは勃起しないだろうと確信する。

そして今、スクール水着姿の女子を見ているが特に何も疚しい気持ちにもならなかった。賢者タイムを経験した事が原因かもしれないが、全く興奮しなかったのだ。

クラスの男子の中で人気の女子は水瀬沙耶香以外に矢吹^{やぶき}七海^{ななみ}という少女がいる。

肩口よりも短いショートヘアで、男子とよく一緒にサッカーなどをして遊んでおり、時折男子と見間違われる。しかし、大体の人は胸の大きさを見てすぐに女子と気づく程には大きい胸がある。

そこが思春期に入った男子達の目を惹き寄せているだろう。

加えて、クリクリとした大きな目にながい睫毛、ぷるぷるとした唇、すべすべで柔らかそうなほっぺ：などなど、ともかく顔が可愛く整った美少女なのである。

性格も男子と遊ぶだけあつて快活な性格で、嫌な顔せずそれでいて男子と一緒に色々なスポーツを楽しむ七海はクラスだけでなく学校内の男子の憧れだ。

高校生と言つても通じるであろう魅力的なプロポーションは多くの男子生徒を精通に導いている。

その七海を見ても息子は物言わぬ棒と化している。

俺はホツと一息つきプールサイドに腰を下ろした。

(俺は正常なんだ…教え子に興奮するなんておかしい事なんだ…)

先程の行為自慰を恥じ、自分を戒める。自分は教師だ、あんな事あつてはならないと。

だがそれでも脳裏から沙耶香の影が消える事はなく、龍司の教師としての心を蝕んで行く。

「――龍司先生？具合、悪いんですか？」

気がつくくと、七海が目の前のプールの淵から身を乗り出すようにして顔を覗き込んでいた。スクール水着を押し上げる胸がプールの縁に載せられてむにゆりと形を形を覚えて深くなつた谷間が露わになる。

暫く俯いていたのが心配を誘つたようだ。

「いや、大丈夫だ。ちよつと疲れててな」

その疲れが射精後の虚脱感とは死んでも言えないため、当たり障りのない回答をする。

「先生って夏休み中も宿直室？ 偶には家に帰ってゆっくりした方がいいんじゃないですか？」

俺が宿直室に泊まり込みで働いているのは周知の事実だ。

ちゃんと心配してくれる七海に誤魔化した自分に罪悪感が湧く。しかし、こればかりは正直に言うことが出来ないので適当に誤魔化し続けるしかない。

「んー、こうして毎日プール解放するつもりだし、課外講習もあるからなあ。家は学校から地味に遠いから宿直室の方が都合が良いんだ。それに宿直室は何でもあるしリラックスメ出来るぞ」

「へーそうなんですなあ……って、あれ？ 課外講習やるんですか？ 何人くらい受けるんですか？」

誰も話聞いてないし手を挙げなかったから誰もいないかと思つてたと、七海が少し驚いた様子で尋ねる。

「…沙耶香一人だけだ」

実際、七海の予想は正しく受講者は誰一人として居なかった。昨日の放課後までは。

「えっ…沙耶香が…?」

俺は特におかしな事を言っていないはずなのに、七海は何故か急に大きく取り乱した様子で何か深く考えていた。

「あの…先生、今からでも課外講習って参加できますか!？」

「え?七海は成績悪くないから受けなくても…」

「あ、えつと…それは…」

言葉が詰まったように七海は「あー、うー」などと呻いている。参加したいと言う思いはひしひしとを感じるが、成績が良い七海が何故課外講習に出たがるのだろうか。

それに課外講習に参加したいのなら昨日の帰りの会で何故言わなかったのだろうか。

「いや、まあ…理由はどうであれ学ぶ姿勢が良いつてのは素晴らしい事だ。参加して全然構わないぞ?」

疑問はあるが、理由がなくても生徒の要望を拒んだりはしない。

生徒ファーストが俺の信条。生徒のために苦労や時間を費やすことは大変で疲れは

するが生徒のためを思えば苦ではない。

「えっ！本当ですか!？」

七海は抱えていた頭を振り上げパアッと太陽のような笑顔を咲かせる。ああ、この笑顔が俺の活力の源だ。

「ああ、参加人数が少ないどころか1人だったからな。そこに1人増えるくらいどうってことないさ。」

それどころか俺にとっては有り難い話で、沙耶香と2人つきりで過ごしたらマズイ気がするのだ。何か取り返しをつかない事になりそうで。俺の第六感が危険だと告げているのだ、水瀬沙耶香に気をつけろと。

生徒を疑ったり敵対する訳ではないが、少し距離を置かないとおけない。朝自のアレ慰の事もあるし、単純に気まずい。

「ありがとうございますー！」

「一応、課外講習は16:00〜18:00の予定だが…今日は参加出来そうか？」

「あ…今日は午後から遊ぶ約束が…」

七海は申し訳なさそうに答える。まあ今日いきなり決めた事だし、仕方ない事だ。俺は特に咎める事もなく笑う。

「うん、それなら目一杯遊んでこい。小学生の内は友達と遊ぶ事も大事だからな。」

「はい…あの先生…」

意を決したように尋ねる七海の顔には不安という文字が書いてある。一体何に不安を感じているのだろうか。

「なんだ？」

口をパクパクとさせた逡巡の後、七海は少し赤くなつた顔を伏せて呟くように言つた。

「…上手く言えないんですけど、沙耶香と2人きりだからって仲良くし過ぎちゃ嫌です…先生が取られちゃう気がして」

どんな悩み事かと思つて蓋を開けてみれば、なんて事はない可愛らしい嫉妬の類のようだった。

だが今の俺にとってそれは核心を突く話で平静を保つていた心臓がドキリと大きな音を立てて脈拍が加速する。

「大丈夫だ、安心しろつて。俺はみんなの先生だからな！」

俺は生徒の可愛らしい嫉妬を笑う教師として笑っているだろうか…。顔がピクピクと引きつってはいないだろうか？

（そうだ、俺はみんなの先生。特定の誰か1人に夢中になつたりなんて…しない…はずだ…。）

口では幾らでも言えるが、心の中では常に揺らぎ続けている。七海はまだ何か言いたそうな顔をしていたが自分を納得させるように息を深く吐くと「信じてますから」と一言残してプールの縁から離れて友達の前へ泳いで行った。

そしてその後は何事もなく午前のプール解放が終わり、七海は後ろ髪引かれるように帰り際に此方をチラチラと振り返りながら友達に手を引かれて学校を出て行った。

俺は昼飯をガツガツと胃の中に掻き込み、午後のプール解放に向かう。これからが本番だと言わんばかりに気合を入れてプールサイドに立ち、プールに入りに来た生徒達に挨拶をしていく。

そして……

「ハーンにちわーセンセ♡」

松田龍司と水瀬沙耶香との水際の攻防が今始まる……!

5. 絶体絶命

喉が渴いたような、声の出し辛さに襲われて声が発せない。たかだか『こんにちわ』と挨拶されただけでだ。

「どうしたの〜センセ?」

甘えるような声で『センセ♡』と呼ぶ水瀬沙耶香は、ラジオ体操の時と変わらぬ格好でプールへとやってきた。

それが朝の出来事を想起させ、俺は再びピンク色を思い出してしまい、心臓がドクンと大きく脈を打つ。

心が忙しくなく、落ち着かない。ただの挨拶に一体何を恐れているんだ俺は。大人らしく挨拶を返すんだ…。

「あつ、ああ…こんにちわだな。」

何故、沙耶香と話すところにも動揺してしまうのか。

昨日の放課後までは普通の生徒と教え子の関係だった。仲が良く愛着のある生徒であるのは間違いない。だが、生徒はみんな正しく平等に見れていたはずだった。

今、水瀬沙耶香という存在が自分の中で他の生徒とは違う『特別』になり始めている

のは、最早否定できないほどに俺は意識してしまっている。

俺はそれがダメだと分かっているのに、水瀬沙耶香を、意識している。いや、意識させられているのか…？

「ふふふ…それじゃあ着替えてくるね〜」

そう言つて沙耶香は女子更衣室の中へと消えていった。

沙耶香の水着姿は去年一昨年と毎年見ている。だが、これまでと同じような目で見る事が出来るのだろうか。

子供らしくはしやく姿を元気だなあと笑つて見守る事が出来るのか…
心臓は未だ高鳴っている。

着替え終わった生徒が続々と更衣室から飛び出してシャワーを浴びてプールへと飛び込んでいく最中、女子更衣室の扉がキィ…と音を立てる。

「じゃーん！どお？可愛いでしょ！」

更衣室から出てきた沙耶香はトテトテと一直線に俺の側に駆け寄るとクルリと回って水着姿をお披露目する。

「あ、ああ…似合ってるぞ」

去年と変わらぬスクール水着だ。

毎年見ているから今更感はないが、スイムキャップを被って準備万端ですと言わんばかりの水着姿は去年と変わらず可愛らしい。

そして、去年より少し成長した沙耶香の水着はサイズが少し小さくなったのか、凹凸の少ない身体にピチツとピチツと張り付き、身体のラインが強調されている。

健常者なら魅力を感じないであろう貧しい身体のラインに、俺は心のどこかで魅力を感じてしまっていた。

その事を胸の中に押し隠し、可愛いという感想だけを述べた。

しかし、沙耶香は俺のコメントに対して思うところがあつたのか顔を顰めた。

「スク水が似合うはなんか複雑なんだけど…先生が好きならそれでいいや」

「…は？えっいやー」

「スク水、好きなんだねセンセ^{フエチ}」

その言い方だと俺がスク水好きの変態みたいじゃないかと、言い返す暇もなく沙耶香はクスリと笑ってシャワーを浴びに行つた

幸い、沙耶香との会話を聞いている生徒はおらず、スク水フエチの疑惑を向けられる事はなかった。

(誰にも聞かれてない…か。)

シャワーで「冷たっ！」と悲鳴をあげる沙耶香を尻目に周囲をキョロキョロと見渡す。特に俺と沙耶香のやり取りを聞いていた生徒はいないようだ。

ホツと胸を撫で下ろすのも束の間、流れるようにシャワーを浴び終わって水で濡れた沙耶香が再び俺の前にやって来る。

「うー冷た…涼しい通り越して寒いよ…。」

身体をぶるぶると震わせながらシャワーの文句を言っている。まあ、分からんでもないが…早すぎるだろ…

「ちゃんと浴びて来たのか？随分と早かったが…」

「ちゃんと浴びたよ！ところで先生はプール入らないの？」

沙耶香は誤魔化すように捲し立て、急に話題を変えてきた。

「一応水着着てるけど、俺は監視員だからな。緊急時にしかプールには入らないぞ。ほ

ら、準備体操始まるから並んでおけ」

俺はサーフパンツの水着にパーカーを羽織っている。そしてパーカーを脱ぐつもりは緊急時以外ない。監視員の仕事をしつかりと熟すつもりでいる。

そして視界の隅ではシャワーを浴び終わった生徒達が集まって準備体操の輪を作り始めていたので、俺は沙耶香にそれに混ざるように指示を出す。

「ふーん、つまんないの〜」

頬を膨らませて不満気な沙耶香だが、それ以上駄々をこねることも無く準備体操の集団に混ざり、人が揃うと一齐に準備運動を始める。

「いっち、にい、さん、しっ〜」

屈伸、伸脚、深く伸脚：肩のストレッチと順番に準備体操を進める沙耶香。

屈伸の時には突き出されたぷりつとしたお尻に、伸脚の時にはクロッチ部に、肩のストレッチや白い腕が振り上げられる度にその脇に視線が奪われる。

勿論、見ては駄目だという葛藤もあるし、監視員として役割をこなしつつチラリと見る程度……

そのチラ見の回数が異常に多い事は自覚せざるを得なかったが、沙耶香は俺の視線に気付いた様子もなく体操を終わらせて、同級生と共にプールへ「ちゃぼん」と音を立てて入水した。

俺は生徒全員が体操を終えてプールに入ったことを確認するとプールの監視台に座ってプール全体を俯瞰する。

プールに入って間も無く、生徒が「わーきゃー」とプールで遊んで騒ぎ始める。午前中と変わらず、男子は悪ふざけを始め、それを見て女子が「やだー」と笑っている。

沙耶香も友達と共にプールを満喫しているようで此方には偶に視線を送る程度で話しかけたりしてくる事はなく時間が過ぎていく。

▽

壁に立て掛けられた時計の針が午後の3時を指し示す頃、俺は監視用の高椅子から降り、無造作に収納されたビート板をキッチンと整理整頓したり、プールの水面のゴミを網で掬ったりと、締めめの作業に入っていた。

「さて、そろそろ閉めるか…」

時間はまちまちだが、時間が経つにつれ生徒は続々とプール上がっていく。プール解放の終わる15:00の30分前には生徒は全員プールから上がってシャワーを浴びて更衣室で着替え、遊びに行つたもしくは帰宅していた。

沙耶香1人を除いて。

“この後の課外講習まで時間あるしもう少し入ってたい”と帰っていく友達にそう言つて沙耶香は広いプールを泳いでいた。

水泳部ではない沙耶香だが泳ぎはかなり得意だ。人がいる状態だと思ひ切り泳げない、そのジレンマから解放された沙耶香は綺麗なフォームのクロールでスイスイと泳いでいる。

「おーい、そろそろ上がってこーい！」

時計を見て、そろそろ切り上げるべきと判断して口に手を添え、大きな声で沙耶香を呼ぶ。

「ーぷはっ！あー泳いだ泳いだ！ってあれ？もう先生だけ？」

夏の空を映し出す水面から顔を出した沙耶香はキョロキョロと周りを見渡し、俺しかない事に今気がついた様子だった。

「とつくの昔にな。皆んな着替えて出て行つたよ」

「ふーん、そうなんだ」

ぱしやぱしやと顔を出して器用に泳ぎながらプールの手摺に掴まり、プールから出てきた沙耶香は少し呼吸が荒く、水の抵抗が少なそうな薄い胸を上下させていた。

「もうプール閉める予定の15時だからな」

「課外講習まであと1時間かあ」

沙耶香はスイムキャップを外し、シャワー場に行き、濡鴉の短い髪をシャワーで洗い流しながら呟いた。

「ああ。まあ、沙耶香は家近いし良いじゃないか。帰ってゆっくりしてくればいい」

一応狭いローカルな上に保護者面談等で生徒の家の場所は大体把握している。沙耶香の家は学校から5分もしないうちに着く程度の近さだ。一度帰ってから課外に来ても余裕が有り余るくらいだろう。

「いや、私そのまま課外に出る予定だよ？」

シャワーを浴び終わり、フェンスに立て掛けてあったラップタオルで髪を優しく拭き上げながらあつけらかなとした様子で言う。

「それまでどうするつもりだ？」

「んー、先生とお話し？でもして…かな？私ちよつと先生に聞きたいことがあつたし」

ー聞きたいこと。

そう言われて、背中に冷たい何かが走る。嫌な予感、虫の知らせ、予兆、それらが俺の不安を掻き立てる。

もしかして、という言葉が全身を巡り抜ける。急に代謝が良くなったように汗が噴き出始める。

「な、なんだ…聞きたい、事って?」

出来れば聞きたくない、逃げたいという気持ちに駆られるも、ここでそれ以外の選択肢を取るのには異常に映る。

沙耶香の質問を聞く以外に道はないと覚悟を決め――

「先生ってさあ、玲子先生のこと好き?」

………ん? レイコセンセイ? え? 玲子先生? あの玲子先生の事が好きかどうか?

それが聞きたい事…?

(…………はああああああ……何だそんな事か……)

これまでの混乱が嘘のように消え去り、思考がクリアになる。心臓の動悸は未だに健在だが、最悪の事態を逃れた俺はホッと一息吐いた。

「えー、ああ〜そうだな。好ましいのは確かだし憧れではあるけど……」

学校一の美人教師で、俺の二つ上の先輩で仕事について優しく指導してくれたり、悩み事の相談も親身に聞いてくれる。あと胸が大きい。

そんな人がお嫁さんになってくれれば、と考えたことがないと言えば嘘になる。だが本当に好きかどうかと言われると、と言った感じだ。

「そうなんだ。……それじゃあー」

「……沙耶香のこと、好き?」

(…………?!?!?)

この一言で落ち着きかけていた俺の思考は再びカオスに落とされる。

どう答えるか……どう答えるのが正解なのか、俺は乱れた思考で脳をフル回転させる。

勿論、沙耶香の事は好ましく思っている、だがそれは生徒としてだ。異性としては

……今日の朝の事があるが、あれは気の迷いだ。そもそも教師という立場上見てはいけないのだ。

この質問に対しては、まず嫌いななどは絶対に言えない。それは沙耶香を傷つける回答だ。

そして反対に安直に好きだとも言えない。変な期待を抱かせてしまうかもしれない。この時期は男女共に思春期に入り始める頃、それが心を浮足立たせるもの。故に俺が言うべき解答は――

「あー、えーと……沙耶香の事は生徒としては大好きだぞ？ だけど、異性としては見れない。俺は大人で、沙耶香はまだ子供だから――」

生徒と教師の正しい関係を説こうするが、俺が全て言い切る前から沙耶香は口元を押さえて俯いた。

「――ひっ……くっ……」

沙耶香は必死に嗚咽を抑え込み震えている。沙耶香の俺に対する好意は知っていた。だが俺はそれに応える事は出来ない。説得の言葉を止める事はできない。

痛々しく可哀想な姿だが、沙耶香のためを思っただけはつきりと言うしかない。

「悪いがそういう目では――」

「先生は大人で沙耶香は子供？そういう目で見れない？…ぷっ、ふふ面白すぎてお腹痛い…」

お腹を抱えてひーひーと笑う姿はまさに抱腹絶倒。沙耶香がここまで声を上げて笑う姿を見たことがないほどにだ。

「一体何を…」

「先生さあ…口では良い子ぶってるけどさー」

「ー沙耶香の事えっちな目で見てたでしょ？」

心臓を文字通り驚掴みにされたような衝撃が走り抜ける。

身体の全身から嫌な汗が噴出し、心臓は激しく脈動し、呼吸は浅く早くなって呼吸が苦しくなっていく。

(…っ?!?!マズイーバレたーいつからマズイーマズイマズイマズイマズイマズイマズイー)

壊れたラジオのように後悔を繰り返す。バレなければ大丈夫は、バレたら大問題。今更後悔したところで、もはやどうしようもない。

これまで自分が積み上げて来た物が風が吹けば一瞬で散ってしまうような塵になっ

た、あるいは、これまで自分がしつかりと踏みしめていた大地が、ひび割れた薄氷にすり替わった気分だった。

「朝の体操の時から、今の今までずっと。沙耶香の事えつちな目で見てたの、全部知ってるから。」

沙耶香は初めから気付いていて俺を泳がせていたのだ。より確実な証拠を得るために泳がせて、自分に視線が送られているのか、気付かないフリをして確認していたのだ。

「あ、いや…そんな事は」

もはや言い逃れが出来ないと分かっているながらも、俺は弁明しようとする。震える口からは自分でも情けない程に弱々しい声が出る。

「大人の人が小学生によくじょーしちやつて恥ずかしくくないの？沙耶香知ってるよ、そういう人のことロリコンって言うんでしょ？」

沙耶香はクスクスと嘲るような笑みを浮かべている。

「ロリコンなんかじゃ…!!」

「ふーん、ここまで来てしらを切るつもりなんだ。」

『呆れた』と失望した様子で沙耶香は吐き捨てる。

長年見てきた教え子に失望されている、見下されている、その事実が俺の心をへし折りにきている。

いや、もはや完全に折れているに等しい状態だが、それでも何とかして弁明しようと思っ
足掻く。

「お、俺はっ…沙耶香の事を大事な生徒だと思っっている…から、そんな目で、見たりは…」
「そーゆーのもういいから。先生がロリコンなのは沙耶香はちゃんと分かってるからそ
んな必至に誤魔化さなくてもいいんだよ？」

「誤魔化してなんかいない!!俺は正常だ…!!」

諦めの悪い大人に沙耶香は軽蔑した表情から一転、挑発的な笑みを浮かべて俺の側に
躍り寄る。

沙耶香の吐息や息遣いが感じられるほどに近い距離で、沙耶香は瑞々しい唇を震わせ
る。

「ーじゃあさ、証明して見せてよ。先生がロリコンじゃないって事を♡」

そう囁く沙耶香の姿は、男を色香で惑わし、その精を搾取する悪魔サキユバスのようだった。

6. テスト

「ー先生がロリコンじゃないって言うならさ、沙耶香が確かめてあげる。」

スク水姿で仁王立ちする沙耶香は自信満々な様子でおかしな事を言い出し始める。

「確かめる…?」

「そう、これから沙耶香が先生をテストして、小学生に欲情する変態ロリコンなのか調べてあげる♡」

変な方向へ話を加速させる沙耶香に置いてけぼりにされ、かなり頭が混乱している俺の第六感が、この「テスト」を受けるのはマズイという事を告げている。

受けたら最後、自分はロリコンの烙印を押される未来が待っている。そんな気がしてならない。これは受けてはいけない…ッ!

「いや、俺はー」

「先生が受けないって言うなら、他の先生に言っちゃおうかな。龍司先生に性的な目で見られたって。」

沙耶香の顔が愉悦でニヤけていく、心なしか声質も楽しげに上擦っている。

反対に俺の顔は悲惨に歪み、脂汗がドバドバと溢れては流れ落ちて行く。

それもそのはず、現時点で俺の教師生命は沙耶香の掌に収まっているのだ。

沙耶香は校内の評判がとても良いため、優等生の沙耶香が俺にセクハラされたと言えば俺の首が飛ぶ確率の方が高いと、俺は考える。

俺の弁明よりも、沙耶香の訴えの方が強い力を持つ事を、沙耶香は知っているのだ。こうなつた以上、俺が沙耶香に逆らう力などないと知っているのだ。

「うっ……それは……」

——拒否権は、ない。だが、これは受けたら俺の尊厳やら人権が悉く剥奪される、そんな予感が俺を苛む。

「ねえ、どうするのセンチ♡? 受けなくてもいいんだよ? その時はあ……沙耶香の口が軽くなつちやうかなあ♡」

つまりは、お前の悪事を衆目に晒すと。そういう腹積もりだと沙耶香は嘲笑う。

それだけは駄目だ、俺の教師人生がかかっている。絶対にあつてはならない。

「……わ、分かつたっ! 受けるっ! 受けるから! だから他の先生に告げ口だけは……ッ」

——言つた、言つてしまった。自分の尊厳の破滅を孕んだテストを受けると、言つてしまった。

恥や外聞など投げ捨てて、沙耶香に縋る。

「ふふっ♡ そんな必至になつて……いつも凜々しくてカッコいい先生が沙耶香に縋り付い

て…カワイイですよ、センセ♡」

溶けるような甘い声を耳元で囁かれる。カワイイと言われて情けない気持ちで心が蝕まれるが、下手な事を言えば沙耶香の機嫌を損ねかねない。故に沈黙を貫く。

「そんなカワイイ先生に免じて、黙っててあげる。でもお、沙耶香のテストに合格出来なかったらあ、沙耶香の言うことなんでも聞いてもらおうから♡」

それはつまり、テストで下手をすると沙耶香の奴隷になるという事に相違ない。

「な、なんでもは流石に…!」

「逆らうようなら学校中に先生がロリコンだつていう噂を広げるから。沙耶香は『他の先生』には言わない約束はしたけど、生徒に関して何にも言われてないし」

自分の迂闊さを呪うも既に遅い。自分で出した条件を後から変えることは沙耶香は許してくれないだろう。

もし沙耶香が噂を広めた場合、狭いローカルの噂なんて直ぐに全体に行き渡る。その噂が他の先生に伝わるのは一瞬だろう。そうになったら教員会議で取り上げられるし、最悪の想定としてはこの学校から俺の居場所がなくなる…!

「…っ!!わかった…ッ!何でもいう事を聞く!だから、この事は誰にも言わないでくれ!!」

沙耶香が張り巡らせた蜘蛛の糸にその身を雁字搦めにされていく。

もはや退路は断たれ、甘い毒で思考を溶かされ、捕食されるのを待つ獲物に成り下がっている。

「約束だよセンセ♡」

「あ、ああ…」

『指切りげんまーん♪』と歌いながら小指を絡ませられる。自分よりも圧倒的に小さい手が、ただただ今は恐ろしかった。

そして、それが終わると沙耶香は妖艶な笑みを浮かべ、身を翻してある方向へ歩き出す。

「それじゃあテストしよつか♡こつちに来てセンセ♡」

沙耶香が手招きするが、俺は激しく躊躇して足を止める。

「いや…待てっ！そこに入るのか…!？」

「他の人に見られていいの？それでいいなら沙耶香構わないけど？」

（沙耶香は一体なにを考えているんだ…!?見られたら困るような事をするつもりなのか…!?だとしたら入らないとマズイ…だが、“ここ”に入るのもつとマズイだろう…っ）

「先生が早く決めないと沙耶香テスト始めちゃうよ？どうするの？センセ♡?」

——俺は葛藤の末に理性と利己心を天秤にかけ、利己心に天秤を傾けた。

▽
葛藤の末に、俺は“女子更衣室”の中に居た。大人、しかも男の俺が入る事はまずあり得ない、女子生徒の領域。

何処と無く、甘酸っぱい良い香りのする密室空間で俺と沙耶香は2人きり。

「それじゃあ始めよっか♡」

更衣室に入って直ぐに扉をパタリと閉めた沙耶香は笑顔で振り返ってそう言った。

「一体何をどうするんだ…?」

「うーんとね、これから沙耶香が先生に指示を出すから、先生がそれをちゃんと出来たら先生の勝ち！逆に先生が指示通り出来ない、あとはあ♡」

沙耶香は態とらしく『あとは』と焦らすようにタメを作って笑う。なにか追加の条件をつけるのだろうか、一体なにを…

「ー勃起したら先生の負けだよ♡」

勃起、まさか天真爛漫な沙耶香の口から勃起などという単語が出てくるとは考えられなかった。

「ぼ、勃起なんてどこで覚えたんだ!?!」

「んー? 保健体育の授業だよ? 玲子先生が教えてくれたよ。せーじゅくした大人同士でセックスすると子供が出来るんだって。その時に勃起についても教えてくれたよ? コンドームは大事〜とか。」

(玲子先生なに教えてんの!?!小学生の保健体育で勃起を教えたの!?!)

俺がアタフタとしているうちに、顎に手を添えて何かを考えていた沙耶香が何か思い浮かんだようで、手をポンと叩く。

「じゃあ最初の指示は、〃沙耶香の体を隈なく手で触る〃!にしよっか♡」

突飛な提案に、俺は自分の手と沙耶香を見比べて固まる。

「…はっ!?!俺の手で…か?」

「当たり前じゃん。出来ないの?…もしかして、もう勃起しちやいそうなの?」
クスクスと挑発するように笑う沙耶香。

勃起するかしなさそうかと言ったら勃起するかもしれない。だが、これをやらないことには俺の人生は終わる。

「いつ、いや…出来る…さ、触るぞ…？」

心を落ち着かせて、心を無にして…勃起せずに沙耶香の体を隅々まで触る…っ

「どぞ♡先生の好きなように触っていいよ♡」

沙耶香は両手を広げ、俺が伸ばした震える手の行方をニヤニヤと笑いながら見ている。いや、俺の憔悴した表情や仕草も含めて全部見て嗤っている。

弄ばれている、だがそれを甘んじて受け入れるしかない。

俺が出来る事は、指示を勃起せずに熟すこと…

俺の人生がかかっている。だから沙耶香に触れる事は仕方がない事なんだ…俺はそうするしかないんだ…

俺は震える手で、沙耶香の手に触れる。

健康的な白さと瑞々しさを持つ細い手は予想よりも暖かくて柔らかい。ぷにぷにした手の平から指先に至るまで隅々まで撫で触る。それはずっと触っていたくなるような感触でー

「…んっ、先生の手震えてるからくすぐりたい♡」

「あっ…すまん…！」

艶やかな沙耶香の声で咄嗟に手を引く。

(危なかった…)

必要以上に触り過ぎていたと、自覚する。同時に俺は沙耶香の体の魅力に虜になりつつあった事に恐怖を覚える。

もつと触りたいという欲望がジリジリと身を焦がしている。

「いや、先生にならどこを触られても♡」

そしてその欲望を肯定する沙耶香の言葉に、俺は無言で再び沙耶香の腕に手を伸ばして柔らかい素肌を手を這わせる。

蛇が這うように上腕から二の腕へと触っていく。二の腕はしなやかかさ柔らかさが両立しており、手を這わせるだけでなく何度もニギニギと強過ぎない力で握ってしま

う。
「んっ…ふっ…ふっ♡」

右腕を触り終わった俺は、左腕も同じように指から肩までその感触を確かめるように触っていく。

沙耶香の体の感触と時折沙耶香から漏れる甘い吐息に俺の理性はガリガリと削られ、自制心が働かなくなってくる。

(柔らかい…)

両腕を触り終えた俺は沙耶香の目の前に座ってスク水から伸びる白い足を捉える。傷やシミのない綺麗で適度に肉の付いた足は更に俺の理性を蒸発させる。

足の指は丁寧に指の隙間に手を入れたり、脹脛や膝の裏も余すところなく触る。

そして視線は太腿からスク水の逆三角形の間を彷徨う。膝の上へと徐々に指を這わせ、ゆつくりと股間の付け根の内股を撫でる。

「あんっ♡触り方がえっちだよセンセ♡」

理性の蒸発した俺は気づいていないが、もはやコレは愛撫に等しい。沙耶香は太腿の付け根を執拗に撫で回されて、身体を時折ビクビクと震わせ嬌声を小さく零している。

両腕両脚を触り終えた俺は次のポイントを探して躊躇していた。微かに残った理性がこれ以上はマズイと叫んでいる。

残るは胸、腹、背中、股間……。背中辺りはまだ大丈夫だ。だが、胸と股間に関しては絶対にマズイ。倫理的に、あと自身の息子的に。

「何を迷ってるの？沙耶香は先生にならどこ触られても良いんだよ？先生がラジオ体操で穴が開くほど見てた沙耶香のおっぱい、好きなだけ触って良いんだよ？」

理性を蒸発させ、欲望に忠実になれと沙耶香は誘惑する。

俺はそれに逆らえない。逆らい難い極上の誘惑に俺は光に集まる蛾のように吸い寄せられていく。

俺は抵抗すら出来ずに欲望に負け、ソロソロと手を沙耶香の小さな胸に伸ばして、触った。

小ぶりの沙耶香のおっぱいは掌に容易に収まるサイズだ。しかし、触ってみると意外にも柔らかい感触が掌に伝わる。揉むように触ればムニムニと形を変える。立派なおっぱいだっただ。

「あつ…ちゃん♡先生揉み過ぎだよ♡」

俺はいつの間にか、恐る恐る触っていたのが嘘みたいに沙耶香のおっぱいを揉みしだいていた。

沙耶香は胸から伝わる快楽で喘ぎ声を抑える事なく発し始める。

俺は欲望を止める事なく手を動かし続ける。沙耶香の背後に回り、右手で胸を揉みしだきつつ、左手で背中や腹に手を這わせる。

「あんつやああ♡先生の気持ちいい♡もつとお♡もつと沙耶香の事触って♡」

沙耶香の嬌声は甘美な毒のように俺の脳を溶かしていく。倫理観や価値観が蕩けていく。あれはダメ、コレはダメという判断力が溶けていく。

そして俺は遂に、スク水の逆三角形に指を這わせた。

スク水の上からでも分かるぷにぷにした恥肉の感触、そして尋常じゃないくらいに湿り気と滑り気。

先ほどまでプールに入っていたからでは言い逃れできない湿り気に俺は触った指を目の前に持つてくると親指と人差し指をピタリとくっつけて離す。

ぬちやぬちやとしたそれは親指と人差し指に銀の橋を架ける。

(沙耶香の愛液…っ!?)

俺は沙耶香の愛液に頭が真っ白になる。

愛液、つまりは沙耶香は雄を迎え入れる準備に入ったということだ。未だに未成熟であろう子宮に。

未だに息を荒くして悶える沙耶香の前に、呆然としていた俺の脳内にある欲望が産まれる。

ー犯したい。沙耶香とセックスがしたい…

教師として絶対にあつてはならない欲望が頭の中を支配する。

そしてその欲望は俺の体の一部に顕著に現れる。

「あれえ？沙耶香の背中に何か硬くて熱いのが当たってますよおセンチ♡」

沙耶香の背中に、水着を押し上げて最大限に勃起した逸物が当たっていた。

沙耶香の指摘でそれに気付いた俺は一瞬にして血の気がサーツと引いていく。

「あつ…いやっ、これは…!!違う!違うんだ!」

「こんなに硬くして、何が違うの?」

振り返った沙耶香にギンギンに聳り立つ逸物を水着越しに掴まれる。血の気はこれでもかと引いていくのに、沙耶香に握られているアソコは痛いほどに漲っていた。

「反論出来ないならあ…先生はテストは不合格♡」

「あ…ああ…っ」

沙耶香の手に確定的な証拠を掴まれているため、反論しようとしても出来ない。俺は情けない声を出して狼狽えるだけで何も言えない。

「ふーん、反論出来ないんだ。それじゃあ♡今日から先生は沙耶香の奴隷だよ♡よろしくねロリコンセンセ♡」

ロリコンの烙印を押され、失意の中俺は沙耶香の奴隷になってしまった。

7. 命令

「――沙耶香の奴隷になった先生に早速お願いがあるだけども♡」

砂糖よりも甘い沙耶香の猫撫で声が脳を溶かす。

沙耶香は「お願い」と言っているが、正しくは「命令」だ。沙耶香の匙加減一つで人生が破滅の一途を辿る。

「……なんだ？」

逆らうことは出来ない、沈黙を貫くことも出来ない。俺は少し沙耶香の「お願い」に今日は覚えながらも、その内容を問うた。

「沙耶香の水着濡れちゃって脱ぎづらいから先生が脱がして」

水着を脱がせとききたか……なるほど…

……なるほど？

「……はあ!? 脱がす?! 俺が!？」

沙耶香の水着を俺が脱がす!? 沙耶香は本気なのか!?

「先生のせいで沙耶香のアソコびしょ濡れになっちゃったからあ責任とってセンセ♡」
びしょ濡れ…沙耶香の愛液…

無意識にゴクリと喉を鳴らす。未だに指先が沙耶香の水着のクロツチ部に染み出た愛液でぬめっている。このぬめりは決してプールの水ではなく、沙耶香の膺から分泌された愛液で間違いない。

その事実が沙耶香の事を犯したいという衝動を再び巻き起こし、冷静になつて萎えかけていた俺のペニスは硬く熱くいきり勃ち、水着を大きく押し上げてその存在を主張した。

当然それは目の前にいる沙耶香の目に入るわけで：

「…♡鼻息荒いですよセンセ♡それに、おちんちんそんなに勃起させて…そんなに沙耶香とセックスしたいの？」

沙耶香の口からセックスという言葉が出ただけでペニスがビクンと震えあがり、その硬度を高めて更には濃いカウパーが水着に染みを作り始める。

「あ、いや…俺は…」

(沙耶香とセックス…したい…！だがそれは絶対ダメだ…ツ！ダメに決まってる…！)

体に沸き起こる衝動、欲望に塗れた思考に素直になりたい。だが、カケラほどに残った俺の最後の理性がそれを押し留める。

「…し、したく…ない…っ」

嘘だ。めちやくちやセックスしたい。そんな欲望が明け透けな拙い返事だった。

勿論その返事を受けた沙耶香も俺の衝動を見抜いているのだろう。愉悦混じりの笑みで『ふうん』と息を漏らしている。

「ロリコン先生にもプライドがあるんだね♡沙耶香、先生の事見直しちゃったー♡そんな立派な先生だったらあ沙耶香の水着を脱がす事くらい出来るよねえ♡」

「…も、勿論だ…」

あいも変わらずカスカスな情けない声が出る。

沙耶香の水着を脱がす、その事を意識すると喉が渇き、息が荒くなる。女性から見たら性欲に塗れたケダモノのように映るであろう俺が近寄ろうとも、沙耶香は身じろぎ一つせず俺の顔をジツと見つめて笑っている。

その沙耶香の視線から流れるように水着の肩紐に視線を落とし、手をかける。

「ぬ、脱がすぞ…?」

「どーぞ♡」

肩に手を置かれているのに沙耶香の声からは不快そうな様子が感じない。むしろ楽しんでる声質だった。

俺は肩紐を摘んで逡巡した後、小さな肩からゆっくりと肩紐外しておろし始める。

普段なら見る事が無いスク水の裏地が肩紐を下げる事で徐々に明らかになっていく。

そして、俺の目の前には沙耶香の胸があり、肩紐を下げることで紺色の生地に隠されたピンク色が顔を出す。

沙耶香の僅かな身じろぎでぶるんと揺れる微かな膨らみの先端にはピンク色の乳首が固くなってその存在を主張していた。スク水のパッドがなければ乳首が勃っていることがバレバレになるほどに。

「…はあはあ…」

揉みたい、ビンと勃った乳首にしゃぶりつきたい、目と鼻の先にあるちっぱいと思う存分舐め回したいという衝動がその身を襲う。

ペニスも刺激を受けたわけでもないのに射精しそうな程に張り詰め膨れ上がる。

「先生の鼻息くすぐつたいよぉ♡そんなに沙耶香のおっぱい好きなのセンチ♡手が止まってるちやってるよ？」

上から響く沙耶香の声で正気に戻る。鼻が乳首と触れる程に近づいていた顔を離して目を逸らした。

目に毒どころの話ではない。沙耶香のカラダは今の俺にとっては何物だ。視界に入れば一瞬で体に衝動という毒を巡らせ思考を欲望で満たすのだ。

「…あ、すつ、すまん…」

俺は膝をつきながら沙耶香の胸部を見ないように視線を更に下に向けて再び肩紐を

下ろし始める。

すると今度は柔らかかそうな腹部が露わになっていく。

クビレがあまりない幼さが全面に溢れる白くてぷにぷにしたお腹を前に、俺は水着越しの感触を思い出しては直に触った感触を想像してしまう。

また、お腹の中心に存在する綺麗なお臍にも視線が奪われるものの何とか肩紐を下ろす手は緩めずに下ろしていく。

そしてー

「……あ……」

肩紐はスルリと沙耶香の腕を抜け、水着で隠された鼠蹊部が露わになり始め、遂には沙耶香の秘部が俺の視界を埋め尽くす。

沙耶香のアソコは体毛の一本もなく、柔らかかそうなぷにぷにの秘肉が綺麗な一本筋を生み出している。

沙耶香の一本筋と肩紐を下ろされて離れていくクロツチ部は白く濁った愛液がツウと糸を引く様子を至近距離で見ってしまった俺は、マズイと感じる間も無くペニスが爆発するように膨れ上がってしまい、その衣擦れの僅かな刺激で限界を迎えー

「あっ……!?やば……っ……射精く……っ」

水着の中に盛大に精液をぶちまけた。朝にいつかい抜いたとは思えない程に濃い精

液がドクドクと大量に吐き出されて水着の中を汚し尽くす。

ペニスには水着の衣摺れ以外に刺激がなかったのにもかかわらず、俺は目の前に映し出される光景だけで絶頂に至ってしまった。オナニーでは味わったことのない深い絶頂に至っていた。

激しい吐精を終えた俺はフルマラソンを走り終えた程の疲労と虚脱感に襲われて尻餅をついた。本日二度目となる射精は俺の思考能力と体力を大きく削っていた。

そしてペニスは痛みを感じてもなお、沙耶香のカラダや密室で漂う沙耶香の甘酸っぱい香りで勃起を維持している。

「ーもしかして、射精したのセンセ？沙耶香の子供まんこ見ただけで射精しちゃったの？やっぱり先生ってどうしようもないロリコンだね♡」

「…はあはあ…」

なにも、言い返せない。もはや自分でも認めざるを得ない。

俺は女子小学生に欲情する変態ロリコンなんだ、と。

そう認めてしまった瞬間に思考がすっとクリアになっていく。幼い裸体を隠そうともせずに俺を詰る沙耶香に賢者タイムすら訪れることなく興奮が沸き起こる。

「ーしたい…」

理性で押し留めていた言葉が口から漏れていく。

「何か言ったセンセ♡？もつと大きな声じゃないと沙耶香聞こえないなあ♡」

「…沙耶香と、セックスしたい…」

遂に言ってしまった。沙耶香に聞こえる大きさの声で俺の欲望を曝け出してしまった。一度踏み外したらもはや歯止めは効かない。欲望という名の電車に乗車した俺は終電^{セックスす。}まで降りることはないだろう。

俺の欲望を耳にした沙耶香は今日1番の艶やかな笑みを浮かべて尻餅をついた俺の側に詰め寄り、耳元で囁く。目の前に桜色の乳首が映し出される。

「ほんとうしようもない変態^{ロリコン}だねえ先生は♡でも沙耶香は優しいからロリコン先生のお願いを叶えてあげようかなあ♡」

「沙耶香…頼む…」

もはや恥や外聞などどうでもいい。一時の快楽で身を滅ぼすとしても、俺は今、沙耶香と気持ちよくなりたいたいという気持ちで支配されていた。

「…先生のおねだりカワイイですよ♡そんなカワイイ先生のおねだりに免じて沙耶香サービスしちやおうかな♡それじゃあ水着脱いでセンセ♡」

俺はこれまでの疲労が嘘だったかのように素早く精液で汚れた水着に手を掛け、一瞬水着を下ろす手が躊躇いを見せるも、眼前の沙耶香の裸体を見て自制など出来るはずもなく、勢いよく水着をずり下ろした。

水着に抑圧されていたペニスが勢いよく腹に当たってヌチャリと粘着質な音を立て露わになる。

快楽を今か今かと待ちわびるペニスは硬く熱く聳り立ち、威光を振りまくかのようにビクビクと震えている。

そしてそのペニスは精液の暴発によって汚れ、ツンとした独特な匂いを発しており、如実に射精した事を物語っていた。

「わあっ♡先生のおちんちん凄くおつきい！沙耶香のおまんこに入るかなあ…♡」

沙耶香は目を輝かせ、観察するように屈み込んで下から覗き込むようにして俺のちんこを凝視していた。

沙耶香にちんこを見られているという背徳感、ちんこを大きいと言われた事による雄の自尊心、沙耶香の一本すじにちんこをねじ込みたいという欲望が膨れ上がって行く。

「この白いのが精液なんだ…くっさあ…変な匂いがする…」

沙耶香の鼻先が俺のちんこに近づいてスンスンと鼻を鳴らして精液の匂いを嗅がれている。時折深呼吸して沙耶香の生暖かい吐息が俺のちんこに直撃する。

「すすん…くさいけど…癖になりそ…」

沙耶香の鼻息が深いものになっていく。スンスンと小刻みな呼吸からスーハーと深呼吸に変わり、俺の精液の香りが沙耶香のカラダに取り込まれている。

そして、ちよつと身じろぎして腰を動かせば小さな鼻か瑞々しい唇に精液塗れのチンポが触れる距離だ。

フェラチオを想起させる状況に、俺は沙耶香の舌や口で気持ち良くなりたいと思ってしまう。

「ぎ、沙耶香…」

沙耶香はそんな俺の欲望を見抜いたのか、上目遣いでこちらの顔を覗き込んで妖艶な笑みをこぼすと小さな舌を精液で汚れたペニスに這わせる。

「ぺろ……うー、変な味……でも……嫌いじゃないかも♡れるお……」

羽で撫でるような控えめな感触が自身の分身に伝わる。

「っ……くぅ……!?!」

その感触による快樂は絶大なものであり、呻き声を漏らすほど気持ちが良かった。

俺の反応に気を良くしたのか沙耶香の舌使いに控えめさはなくなり、まるでペニスに付着した精液を舐めとるように沙耶香の舌が俺のちんこを駆け巡る。少しざらついた感じの舌が根元から亀頭を往復し、鈴口や大きく張ったカリの溝にたまった精液を丁寧に舐めとっていく。

沙耶香の表情に嫌がる素振りはなく、むしろ嬉々として精液を舐めとっているように見える。

(沙耶香の舌が…っ俺のちんこを舐めて…つくあ…気持ち、良すぎる…っ)

可愛がってきた教え子の沙耶香に舐められていただけであつという間に射精に達してしまいそうな程に俺のちんこは爆発寸前までに膨張した。

単純な刺激の他に、教え子にフェラされている、精液の味を覚えられてしまったことなどに強い背徳感が興奮を煽る。

沙耶香の舌によるペニスへの刺激は強烈で二度の射精を経てなければ最初のひと舐めで沙耶香の顔を真っ白にコーティングしていた自信が俺にはあつた。

下から上へと何度も何度も駆け巡る沙耶香の舌に必死に耐える。

「れろ…んう…先生の大人おちんちん綺麗になつたあ♡」

沙耶香の舌が離れてペニスが名残惜しそうにビクビク震える。初めてちんこを舐めるとは思えない舌技だった。

沙耶香は小学生だからないとは思いたい、性体験があるのではないかと疑うレベルで…

「沙耶香初めてだよ?」

「あ、え?俺口に出てたか?」

「顔に書いてあるもん、先生分かりやすいから顔見れば大体分かるよ。例えばあ…さっきの沙耶香のぺろぺろ気持ち良かったーって顔はすごく分かりやすかつたよ♡」

そんなに顔にでるのだろうか…単純に沙耶香の洞察力の問題ではないだろうか。いや、多分気持ちいいという顔は露骨に出てたとは思うが…

「先生のおちんちん折角綺麗にしたのに先っぽからなんか出てる…」

射精寸前まで高められた俺のペニスは我慢汁をダラダラと垂れ流している。

沙耶香はそれをむーつとした目で見つめ、何を思ったのか口を大きく開けて過膨張する龟头を咥え込み、舌は鈴口を撫でるように動かし、口を窄めてちゅーちゅーと吸うように軽く頭を前後に動かし始める。

「うおっ…!？」

沙耶香のフェラチオの快楽は凄まじく、沙耶香の啞内は暖かく極楽湯に浸かっているようでも、激しい快楽の責め苦に合っているようでもあった。出来ることならいつまでも啞内にちんこを留めておきたいと思うほどに気持ちが良い。

「お前っ…こんなの、どこで…覚えてんだ…あぁっ」

「じゅるっ…んう…ずちゅ…♡」

沙耶香は俺の悶える様子を上目遣いで見てより一層激しく俺のちんこに吸い付いた。

沙耶香の小さい口では龟头部しか咥えられていないが、逆に言えばちんこの一番敏感な所が激しく刺激されているわけで、射精寸前の俺にそんな口撃を受ければ即座に射精に至るのは当然のことだー

「あつ…沙耶香っ！まずいっ…で、射精^でるッ…!!」

まずいと思った時には俺のペニスは一際大きくビクンッと震えて白濁を沙耶香の啞内にぶちまけていた。

教え子のフェラチオを受けて啞内に精液をぶちまけているという相乗効果で吐精の勢いは激しく、沙耶香の啞内を生臭い粘着液で満たしていく。

「んんうっ!？」

当然、事前告知のないまま射精したため沙耶香は啞内を精液に蹂躪されて驚愕の声をあげる。

だが、頑として俺のちんこからは口を離さず、一滴も精液を零さずに俺の射精を受け止めている。

気の遠くなる吐精が終わりを迎え、暴れまわっていたペニスの脈動が止まり、沙耶香はズルズルと亀頭から口を離した。

「んっ…んむう…ふぁ…♡」

沙耶香は口を大きく開けてたっぷりと啞内に溜まった精液を見せびらかす。口の周りは飲みきれなかった精液や俺の陰毛が付着し、小さな啞内は白濁液でドロドロに穢されておき、粘着質な濃い精液が舌や歯にこびりついている。

「…(っ)っくん…♡…はぁ…♡」

それを舌で転がしてから味わうように飲み込み、ごつくんと喉を鳴らして大きく息を吐いた。

「(い)ち(そ)ー(や)ま♡」

精液を全部飲んだよ、と唾内を見せるように大きく口を開く。教え子と淫行に及び、健康的な小さな唾内に俺のちんこが突っ込まれ、精液が流し込まれたと思うと酷く興奮した。

その興奮は如実に疲れ切って萎びたペニスに現われ、再び大きく太い剛直へと変化する。

正直もう一滴も出ない、勃起すると痛いレベルまで来ている。だが、それでも沙耶香とセックスするという目標を達成するまでは俺のちんこは何度でも勃起出来る自信があった。

「まだ、出来るよね？・センセ♡」

俺の再び硬くなったペニスを見つめながら沙耶香が火照った顔で囁いて小さな手で竿を握る。それに応えるようにペニスがビクリと跳ねる

時計の針は16:00を既に越えている。課外講習開始の時間は過ぎていた。

8. 課外講習～1日目～

換気扇もなく、ドアも閉め切った女子更衣室は発情した2人の男女の体液で噎せ返るような匂いで満たされ、蒸し蒸しと熱が籠っていた。

例えるならサウナに入っているようなジメジメとした暑さだ。額や身体からは汗が絶え間なく流れていく。

もはや熱中症を発症するのではないかという暑さだが、俺はそんな事まるで気にしていなかった。いや、気にする余裕すらなかった。

俺の全意識は目の前の幼き少女の裸体に向けられているからだ。

熱の籠った室内の茹だるような暑さに沙耶香も同じく汗を流しており、前髪はぺたりと額に張り付き、顔は熱に浮かされたように火照り、起伏の少ない裸体はじつとりと汗で濡れている。

額の汗を拭いながら熱のこもった吐息を吐く姿は言いようのない色香や艶やかさを醸し出している。

「課外講習…始まつちやっただねセンセ♡」

俺が沙耶香のカラダを視姦するように眺めていると沙耶香が備え付けの時計を見て

呟いた。

確かに時計の針はとつくに16時を過ぎており、課外講習の開始を告げていた。

「あ、ああ…：そうだな…：で、でも課外講習は明日からでもー」

俺は課外講習を理由にこの淫らな行為が終わることを恐れた。この機会を絶対に逃したくない。

長年、生徒ファーストで生徒のために動いてきた俺が、今自分の欲望のために動こうとしてしまっている。

「えく？ちゃんど課外講習はしないとダメだよ？そのために沙耶香は学校に来てるのに。先生だつてそうでしょ？？」

「さ、沙耶香…：それはそうだが…」

沙耶香の言っていることは正しいが、快樂を待ち望んでガチガチに勃起した俺のペニスは快樂を待ち侘びて悲鳴をあげる。

限界まで高まつたりビドローがそう簡単に収まることはなく、目の前の雌で気持ち良くなりたいたいと訴えている。

もし本当に沙耶香が課外講習を優先すると言うのなら襲いかかって強姦に及んでしまふ。それほどまでに沙耶香によつて俺は興奮させられている。

「沙耶香とセックスしたくて堪らないって顔してるよセンセ♡課外講習放つたらかしに

して沙耶香とえっちしたいんでしょ♡」

「し、したいっ!」

脳で思考する前に口が動いていた。今の俺は性欲に忠実なケモノと言っても過言ではない。快樂のためだったら恥も外聞もかなぐり捨てる。

発情期の猿のような盛り具合の俺を見て、沙耶香は軽蔑した様子もなく、むしろ悦んだ表情でクスリと笑うと体液塗れのペニスに手を這わせ、割れ物を扱うかのようにさわさわと亀頭を撫で回した。

「それじゃあ、課外講習は保健体育つてことにして沙耶香と実技えっちの勉強しよっか♡これからあ…ま・い・い・に・ち♡」

沙耶香の細い指がエラの張ったカリ首に蛇のように巻きつき、ゾクゾクとした快感がペニスに走る。

これから毎日沙耶香とえっちで気持ち良くなれる、沙耶香の悪魔のような提案は酷く甘美なものだった。その果てに待ち受けるものが破滅速挿だとしても、未発達な青い果実に手を伸ばしてしまふ。

「ああ…毎日…沙耶香とえっち…したい」

「ふふっ…いーよ♡先生の気の済むまでえっちしてあげる♡」

しゆるしゆるとカリ首を這いずっていた沙耶香の指が離れる。

俺は名残惜しそうに離れ行く手の先を追って、固まる。

「舐めて♡」

傍らの長椅子に腰を浅くかけた沙耶香は腰を突き出し、俺のペニスを抜いていた指で自らの秘所を押し開いて言った。

鮮やかなピンクの粘膜がクチュリと音を立ててその全てを曝け出される。

——見えている。沙耶香の幼い秘所が全てが露わになっている。

産毛すら全くない無毛のぶにとした大陰唇が指で菱形に押し開かれ、綺麗で鮮やかなピンクの小陰唇、そして陰核クリトリクスから尿道、そしてヒクヒクと拡張を繰り返す小さな膣口、その下位置する薄ピンクのアナルに至るまで全部。

教師であれば絶対に見ることがあつてはならない沙耶香の秘められた場所が全て見えている。

“もつと近くで見たい”と、俺は欲望のままに沙耶香の股間に吸い込まれた。

目と鼻の先、吐息が当たるほどの距離まで接近して沙耶香のおまんこを観察する。

黒ずみやびらびらの全くない綺麗なヴァギナがそこにはあった。陰核は慎ましくちよこんと露出しており、小さな膣口からは涎を垂らすように愛液が湧き出ている。

そして、開かれた花卉からむわつと匂い立つ甘い香り。

(沙耶香のおまんこの匂い……っ、……気を抜いたら暴発しそうだ……)

沙耶香の甘い体臭と愛液で濡れたおまんこの淫らな香りが鼻腔を犯す。刺激的過ぎて興奮が常に最高潮を更新し続けている。

(…エ、エ口過ぎる…っ、ここを…俺が…舐めるのか…?)

眼前でヒクヒクと蠢く生々しいピンクの肉襞を前に、舌は自然と伸びて触れるか触れないかという、第三者が見たら即通報の状態で俺は躊躇う。

「くすぐつたいよ先生え…♡?」

視覚と嗅覚によつて俺のリビドーは青天井だった。自身の性欲を拒まない沙耶香の態度は益々俺の欲望を掻き立てた。

(…こんなの我慢出来るわけないだろ…っ)

そんな最中に挑発めいた事を言われて止まれるはずもなく、俺はゴクリと喉を鳴らし無言で舌をゆっくりりと沙耶香の幼くも淫らに濡れた秘所に這わせる。

「…あっ♡ひう…っ♡ふ…うっ…♡」

初めは恐る恐る舌が触れるだけだったが、沙耶香が甘い声でカラダを震わせるのを見て次第にクンニの激しさは増していき、曝け出されたピンクの粘膜を湿らせる愛液を余す所なく丁寧に舐め取るように舌が駆け巡る。

沙耶香のまんこを覆い尽くすように口を大きく開いて吸い尽くすと、汗と愛液が混ざり合つて少ししよっぱく生々しい味がした。

(これが沙耶香の…愛液の味…)

沙耶香のおまんこにむしゃぶりつきながら愛液の味に背徳の興奮を感じざるを得なかった。幼き少女の蜜壺の味は美味とは言えないが、背徳の蜜だった。

もつと蜜が欲しいと俺は小さな膣口に舌をねじ込むようにクンニを続ける。

「あつ…はつ♡先生に、舐められて…るう…♡沙耶香…イツちやいそお…♡」

沙耶香はそれを嫌がる様子はなく、クンニの快楽に打ち震えている。細い両脚をクンニを続ける俺の背中にガツチリと拘束するように回し、手は俺の頭を押さえている。

そして絶頂に近いのかその力は益々強くなり、カラダもビクビクと震えている。

「先生のぺろぺろ…気持ちいいよお…♡もつとお♡」

更なる刺激を求める沙耶香に対し、俺はクンニの手は休めずに指で慎ましく勃起した陰核をトドメと言わんばかりに指でキュツと軽く摘み上げると沙耶香は大きく背を弓なりに反らせー

「あつ♡やば♡それっ…♡イツ…くうううううっ♡♡♡」

沙耶香は絶頂とともに盛大に潮を吹き、俺の顔面に勢いよく水飛沫が降りかかる。絶頂によるカラダの震えと連動するようにプシュップシュツと小刻みに噴出を繰り返す俺の顔を水浸しにする潮が口に入ることも厭わずに俺はクンニを続け、潮吹きが終わるまで顔を離さなかった。

「…あ…は♡先生に、イカされてえ…お漏らししちゃったあ…♡♡すっごく気持ちいいよ…♡センセ♡」

激しい絶頂の余韻にどっぷりと浸かった沙耶香が淫らな笑みを浮かべて俺を見下ろしている。

俺は沙耶香を絶頂させたという優越感にも似た背徳の興奮に頭を犯される。

目の前でヒクついている小さな穴に挿入したい、それだけしか頭がない。

「先生のおちんちん、苦しそう…♡先生はあ…どうしたいの♡?」

絶頂したばかりのおまんこを見せつけるように俺の最大限に勃起し我慢汁塗れの俺のペニスに跨り、沙耶香が轟惑的な表情で俺に問う。このようにお膳立てされてはもはや答えなど一つしかなかった。

「沙耶香のおまんこに…挿入いりたい…」

沙耶香の幼い割れ目に不釣り合いなペニスを愛液を塗りたくるように押し当てて。あと少し力をいれるだけで愛液で濡れそぼった膣道に龟头が飲み込まれるだろう。

しかし、沙耶香の許可が出るまで挿入は出来ない。焦らすように笑う沙耶香の愉悅に満ちた瞳を見つめる。

「…あはっ…♡いつも凜々しくてかつこいい先生だと思ってたのに、沙耶香のこと犯しなくて堪らないって顔してるよセンセ♡」

沙耶香はイジワルな笑みを浮かべて腰をチンポに擦りつけるようにグラインドさせる。

又チャ又チャと互いの陰部が擦れ合い、満遍なく沙耶香の愛液が俺のチンポに塗り込まれる。もはやその感触だけで射精イキそうだった。

「情けない顔してる先生が可哀想だからあ♡沙耶香の子供まんこにい…♡先生のガチガチ勃起大人ちんちん挿入いれてあげる…♡♡」

散々焦らされた俺の亀頭に又チャリと暖かい粘膜が接触し、ゆつくりと柔らかい媚肉に包まれていく。

大量の先走り汁と愛液が潤滑液として役目を果たし、ヌルヌルと亀頭が飲み込まれていく。

(なっ…んだ…コレ…気持ち良すぎるだろっ…?! 膣内がうねって…ドンドン飲み込まれて…っ!?)

まだ亀頭しか入っていないが、この時点で射精してもおかしくない程に沙耶香のまんこは間違いなく名器と呼ばれるシロモノだった。

狭い膣内は無数の襞がチンポを撫で回し、締めりと緩みを絶妙に繰り返してチンポを膣奥へと誘い、搾り取るように蠢いている。

「あっ♡…うう…っ♡」

意外な程にスムーズに膣内を進むチンポだったが、一瞬小さな抵抗を感じたが、少し顔を顰めた沙耶香は腰を少し強めに下ろした瞬間『つぶっ』という感触ともにチンポが飲み込まれ、2/3程チンポが挿入されたところで亀頭が膣奥にコツリと接触する。

「つく…さ、沙耶香…大丈夫か？」

一気に膣内へとチンポが飲み込まれて一瞬危なかったが、なんとか射精を堪えて沙耶香と目を合わせる。

今のはおそらく、俺が沙耶香の処女を破った瞬間だったのだろう。沙耶香は目尻に涙を湛えながらぎこちなく笑っていた。

「うっ…こんなの痛くないもん…それより先生の方がヤバイんじゃないの？おちんちん沙耶香の膣内でびくびくしてて…射精しそうなんですよ♡」

凶星である。処女を奪った全能感というべきか達成感というべきか、それらと純粋ながらも絶大な挿入の快感で、俺のチンポは射精寸前だった。

それに拍車をかけるように、沙耶香が俺に凭れ掛かり耳元に口を寄せて吐息混じりに呟いた。

「…沙耶香、未だ生理^{せいり}きてないからあ中出しし放題だよ♡♡」

これでエンジンがかからないほうがおかしいだろう。小さな穴を押し拡げるほどに

チンポは膨張し金玉が精子を急ピツチで製造し始める。

ナマで挿入しておきながら何を言っているのだと思われるかもしれないが、中出しが出来ると聞いて俺の性欲は大炎上した。

「あはっ♡先生おちんちんさつきよりもおつきくなってるう…♡子供でガチガチ勃起しちゃう悪い大人チンポはあ…沙耶香のまんこで退治しちゃうから♡♡」

そう言っつて沙耶香は腰をゆっくりと動かし始めた。手始めに軽く上下に揺するような腰の動きだった。

しかし、そこからチンポへと与えられる快感は想像を絶するものだった。

「うっ…ぐうう!?!キツ…っ!?!」

少しのピストンで膣壁が生きているかのように蠢きチンポに絡みつく、さらにはちやうど亀頭の辺りに粒状の膣壁が点在して強い刺激を亀頭に与える。

ズルズルとチンポが出たり入ったりを繰り返し、その都度奥に引きずり込むように膣内が蠢き、チンポを離して逃がさないと言わんばかりに吸い付くのだ。

(気持ち良すぎる…っ!!搾り取られるっ!?)

沙耶香のまんこは蚯蚓千匹、数の子天井、蝟壺、俵締め、などなど名器と呼ばれる全てがそろったような名器の中でも最上級に位置するまんこだった。

昔付き合った彼女や、風俗嬢といった女性遍歴の中で1番の名器なのは間違いなかつ

と膨らみ、結合部からは絶えず愛液が溢れ出ており、快楽を享受している事を如実に表していた。

こんないやらしい生徒ではなかった。俺の知っている沙耶香は懐っこくて、快活な少女で：こんな淫らな表情なんて：こんなエロい顔なんて：

沙耶香との思い出が走馬灯のように脳裏を過ぎていく、沙耶香との思い出を思い出せば出すほどに、今日の前に広がる光景が情欲を昂らせる。

「あっ♡んうっ♡♡沙耶香もイくからあっ♡♡先生も一緒に♡♡♡♡」

沙耶香も絶頂に近づきつつあり、腰の動きが激しさを増していく。それに伴って、2／3程しか入っていないかった肉棒がさらに深く膣内へと飲み込まれ、亀頭にきゆうきゆうと吸い付く子宮口の感触と、膣内の強烈な締めまりで射精を確信する。もう我慢出来ない。

「くっ！沙耶香っ…止まってくれっ…膣内はマズイ…っ！」

せめてもの抵抗で腰を引かしてぎつつちりと啜えこまれた男根を引き抜こうとするも、それを嘲笑うかのように沙耶香はニタリと嗤い、ズンツと腰を打ち付けるように落とした。

「ーっ!?あっ…ぐっ…まずっ…で、射精るっー」

強烈な快感を脳が処理する間もなく、我慢の限界は訪れた。脳が焼き切れるかなのような快楽に襲われる最中、俺は沙耶香の腰をガツチリと掴み沙耶香の1番深い所に亀頭を押し付け、マグマのように煮えたぎった熱い欲望を解放した。

ドビュルツッ!ビュルルルツッ:ドビュルツッ:ドビュツッ:ビュルルルツ!!!

「あああああつ?!♡♡♡先生のせーえきっ♡♡♡沙耶香のまんこにいつぱいきてるううううううっ♡♡♡」

今日1番の絶頂で震える沙耶香の膣内を白濁色に染め上げる。ゼリーののような粘度と濃さをもった精液が搾り取られていく。

「あつ…ぐっ…絞り…取られる…っ?!」

最後の一滴まで強請るように膣内が蠢き、睾丸で製造される精子を根こそぎ搾取らんとチンポを締め上げている。

普通の射精よりも何倍も気持ちが良い、何倍も長く大量に射精したという実感が脳内に深く刻み込まれる。

俺は強烈な快楽で完膚なきまでにショートした頭で、今まで生きてきた中で最大級の快感に打ち震えた。

快感の余韻に浸っていると、ズルズルと小さな膣口から硬度をなくしたチンポがデロんと抜け落ちた。すると一旦間を置いてから、ぽとりとゼリーのような精液が沙耶香の

小さな膾口から漏れ出して地面へと垂れていった。

盛大に絶頂した沙耶香は自分の胸に凭れ掛かり、絶頂の余韻からかカラダを震わせて深い呼吸を繰り返していた。

射精後の気怠さの中、やってしまったという後悔より沙耶香の事を愛おしく思う気持ちが勝り、俺は沙耶香の頭を労わるように撫でた。

キョトンとした顔の沙耶香と目が合う。

「ー私先生に撫でられるの好きだよ…」

もつと撫でてと、くしやりと笑う沙耶香は俺のよく知る可憐な笑みを浮かべていた。

その後俺と沙耶香はしばらくは裸のまま抱き合う時間を過ごした。

こうして夏休みの課外講習が始まったー